泌尿紀要31巻7号
1985年7月

下部尿路不定愁訴に対する清心蓮子飲の使用経験

富山医科薬科大学医学部泌尿器科学教室（主任：片山　喬教授）
寺　田　為　義
石　川　成　明
片　山　　喬

THERAPEUTIC EXPERIENCES OF SEISHINRENSHIIN IN PATIENTS WITH EQUIVOCAL COMPLAINTS OF LOWER URINARY TRACT

Tameyoshi TERADA, Shigeaki ISHIKAWA and Takashi KATAYAMA
From the Department of Urology, Faculty of Medicine, Toyama Medical and Pharmaceutical University
(*Director: Prof. T. Katayama*)

To study its clinical effect, Tsumura Seishinrenshiin, was administered to male patients of chronic prostatitis and urethritis with various equivocal complaints of the lower urinary tract and female patients complaining of cystitoid symptoms inspite of normal urine. These subjects were 35 males, 20 to 69 years and 7 females 22 to 78 years.

For the patients who had constitutionally infirm stomach and intestines the rate of effectiveness reached 41%, which was rather satisfactory. For the other patients, however, it was only 28%. Besides no correlation was observed between the age of patient and the effectiveness. A combined administration of antibiotics and antibacterial agents led to no increase in the effectiveness.

All of the side effects were rather slight, which permitted its continuous administration over a period of more than 4 weeks.

From the above findings Seishinrenshiin was expected to be both effective for the patients who have constitutionally infirm stomach and intestines and can be used safely.

Key words: Seishinrenshiin, Equivocal complaints, Chronic prostatitis, Chronic urethritis

はじめに

日常診療においてがんこな不定愁訴の続く慢性の前立腺炎や尿道炎の患者，あるいは尿所見その他の検査で異常がないにもかかわらず膀胱炎様症状を長く訴える患者などに遭遇することが多い．こうした病態に対してはなかなか有効な治療法が見あたらず，患者自身はもとより医師の側も苦慮することがしばしばである．

近年西洋医学の領域においても漢方への関心が高まりつつあり，泌尿器科領域でも，前立腺肥大症・尿路結石・男性不妊症・膀胱炎・前立腺炎などに対する漢方治療の経験が報告されるようになってきた．今般，われわれは前述のごとき不定愁訴を持つ患者に対して，慢性泌尿器疾患に有効な処方といわれてきた清心蓮子飲を投与してみたのでその成績を報告する．

対象および投与方法

対象は1981年9月から1983年12月までに富山医科薬科大学付属病院泌尿器科外来を訪れた患者のうち，慢性前立腺炎又は尿道炎で不定愁訴の持続する男子35例，

Table 1.　男子不定愁訴群

症例	年齢	診断名*	主　　訴	胃腸障害	投与期間(週)	併用薬	効果	副作用
1	44	P	会陰部疼痛・下腹部不快感	−	4	—	無効	—
2	60	P	残尿感・頻尿	−	6	—	やや有効	—
3	23	P	下腹部不快感・頻尿	+	8	MINO	著効	—
4	42	P・U	排尿痛	+	8	ST	やや有効	—
5	49	P	下腹部不快感・睾丸痛・下腹部重感	−	4	—	有効	—
6	51	P	会陰部疼痛・排尿痛・頻尿・残尿感	+	4	—	無効	—
7	34	P	下腹部疼痛	−	4	—	やや有効	—
8	31	P	頻尿・残尿感	−	4	—	やや有効	—
9	38	P	頻尿・残尿感	−	4	—	やや有効	—
10	44	P	排尿痛・残尿感	−	4	—	無効	発汗
11	29	P	下腹部疼痛	+	6	DOXY	やや有効	喀痰
12	38	P	頻尿・残尿感・排尿痛・尿道不快感	+	30	DOXY	やや有効	ふらつき
13	48	P	頻尿・排尿困難	+	6	—	著効	—
14	41	P	下腹部疼痛・会陰部不快感・頻尿	−	12	ST	やや有効	—
15	33	P	頻尿・残尿感	−	6	ST	無効	—
16	23	P	下腹部不快感・排尿痛	−	4	DOXY	有効	—
17	45	P	睾丸痛・会陰部疼痛	+	4	—	無効	—
18	33	P	下腹部疼痛・下腹部不快感	+	4	—	著効	—
19	42	P・U	下腹部不快感・下腹部重感・頻尿・残尿感	+	26	MINO DOXY	無効	—
20	36	P	残尿感・排尿困難	−	4	—	著効	—
21	27	U	尿道不快感	−	12	—	有効	—
22	29	P	会陰部疼痛・尿道痛・頻尿	−	4	—	著効	—
23	47	P	残尿感・排尿困難	−	4	—	無効	—
24	20	U	排尿痛	−	20	ST・DOXY MINO	無効	—
25	38	P	排尿痛・会陰部疼痛	−	4	—	やや有効	—
26	33	P・U	残尿感・排尿困難	−	6	ST	著効	—
27	38	P	下腹部重感・尿道痛	+	4	ST	無効	下痢
28	39	P	会陰部疼痛・排尿痛・排尿困難	+	14	ST	有効	—
29	69	U	尿道不快感・下腹部重感	+	4	—	無効	—
30	45	P	頻尿・下腹部疼痛・下腹部不快感	−	6	—	無効	—
31	46	P	排尿困難・残尿感	−	8	—	無効	—
32	40	P	会陰部疼痛・睾丸痛・下腹部疼痛	+	8	ST	有効	—
33	56	P	尿道不快感・排尿痛	+	8	ST	有効	—
34	33	P	頻尿・排尿痛・会陰部熱感	−	4	—	無効	—
35	55	P	残尿感	+	10	—	有効	下痢

*P：慢性前立腺炎，U：慢性尿道炎

および，尿所見正常かつ尿道・膀胱に器質的異常がないにもかかわらず膀胱炎症状を呈する女子7例である．男子群の年齢は20～69歳，平均40.0歳であるが疾患の性質上30歳代・40歳代に集中している．いずれも分泌物鏡検で膿球を各視野10個以上確認しており，細菌培養は全例には施行していないが非細菌性のものが過半である．患者の訴える症状は実に多種多様であるが，下腹部・鼠径部・会陰部の重感・鈍痛がもっとも多く見られた(Table 1)．女子群の年齢は22歳～77歳平均52.8歳である．(Table 2)．

薬剤は清心蓮子飲エキス顆粒 7.5g 1日3回分服，4週間以上連続投与をおこなった．清心蓮子飲単独投与をおこなった群は26例，抗生剤または抗菌剤の併用をおこなった群は16例である．

結　　果

効果判定は石橋ら[1]の判定規準を若干変更し応用した．すなわち4週以内に症状がすべて消失したものを著効，4週では消失しえなかったものの以後の投与で消失したものを有効，軽減はするが4週以上の観察期間中に消失しえないものをやや有効，不変あるいは悪化したものを無効とした．有効率は著効・有効両者の合計を百分率であらわした．

1）年齢との関連：清心蓮子飲は虚証向けに近い薬

Table 2.　女子不定愁訴群

症例	年齢	主　訴	胃腸障害	投与期間(週)	併用薬	効果	副作用
36	56	排尿痛	−	4	—	やや有効	—
37	77	排尿痛	−	4	PPA	無効	—
38	40	頻尿・尿失禁	−	4	—	著効	—
39	52	頻尿・残尿感	−	4	—	無効	—
40	23	頻尿・排尿痛	＋	6	—	やや有効	—
41	54	頻尿・下腹部不快感	−	4	PPA	無効	—
42	68	残尿感	＋	6	—	無効	—

Table 3.　年齢層別臨床効果

年齢	著効	有効	やや有効	無効	著効有効(%)
20〜29	2	2	2	1	57
30〜39	3	1	5	3	33
40〜49	2	2	2	7	31
50〜59	0	2	1	3	33
60〜	0	0	1	3	0

Table 4.　併用薬の有無と臨床効果

併用薬	著効	有効	やや有効	無効	著効有効(%)
有	5	3	7	11	31
無	2	4	4	6	38

Table 5.　胃腸障害の有無と臨床効果

胃腸障害	著効	有効	やや有効	無効	著効有効(%)
有	3	4	4	6	41
無	4	3	7	11	28

剤であるという観点から，老人の方が良く効くであろうとした報告[2]があり，われわれも同様に考えていたが，年齢層ごとに効果を見てみると，Table 3 のごとくとくに年齢による差異はなかった．ちなみに39歳以下と40歳以上の2群に分けて比較検討してみたが統計学的に有意な差は認められなかった．

2）抗生剤・抗菌剤併用との関連：疾患の性質上，抗生剤・抗菌剤と併用になることが多いが Table 4 のごとく，単独投与群と併用投与群間に有意差は認められない．

3）胃腸障害の有無との関連：胃腸虚弱な体質であるかいなかが清心蓮子飲の適応のポイントになるといわれているが，Table 5 のごとく平素より胃腸障害のある患者群に対しては有効率41%を得，統計学的に有意ではないが，胃腸障害のない患者に比しより有効であると思われた．

副　作　用

副作用として軽い下痢が2例，喉のあれ・ふらつき・発汗が各1例見られたがいずれも軽微なものであり継続投与可能であった．

投薬前後に血液検査を施行したものは10例にすぎないが，血液一般・血小板数・血清電解質・BUN・Cr 肝機能いずれも正常範囲内の変動であった．

考　　察

漢方では患者の自他覚症状すべてを統合し得られる診断を証と呼び，証に応じて治療方針が決まり投薬がおこなわれる．証の決定が正しければほぼ治癒したも同然といわれる．この証を決定するにあたりもっとも重要なものは，患者の体力の質的な充実度をあらわす虚と実，ならびに体力を量的な面からはかった陰と陽，の2つの概念である．たとえば清心蓮子飲の場合，その適応になる証は虚実間小陽病期といわれている[3]が，漢方医でないわれわれが，この虚実陰陽の概念を正しく理解し，正しく証を決定することはきわめて困難である．したがって病状の面だけから患者を診，証に関係なくアトランダムに投薬することにならざるをえない．前述のごとく清心蓮子飲の治療成績が今ひとつかんばしくない原因はそこにあったのかもしれない．

清心蓮子飲を構成する生薬は茯苓（ブクリョウ）・黄芩（オウゴン）・車前子（シャゼンシ）・黄耆（オウギ）・地骨皮（ジコッピ）・麦門冬（バクモンドウ）・蓮肉（レンニク）・人参（ニンジン）・甘草（カンゾウ）の9種である．このうち茯苓・黄芩・車前子・黄耆・地骨皮は消炎利尿作用を有する[4]といわれ，それが尿路系不定愁訴に有効と理解される．また，黄耆・地骨皮・麦門冬・蓮肉・人参は強壮作用を持ち[4]，やや体力低下気味の虚実間小陽病期の患者に補剤として働くと考えられる．ただしわれわれのデータでは高齢者ほど良い効果がえられるというような結果はえられなかった．また茯苓・黄芩・人参・甘草は胃腸障害にも有効で，かつ地黄を含んでいないことが，清心蓮子飲が胃腸虚弱な体質に適応とされるゆえんであるが，われわれも胃腸虚弱な患者には41%とやや高い有効率をえた．

これら生薬は上記以外にもさまざまな効果を持っており，複合することによってさらに複雑な作用を発現する可能性がある．最近では生薬の薬効評価が西洋医学的にも可能になってきているので，こうした点が解明される日も近いと考えられる．

結　　語

1．慢性前立腺炎・尿道炎でさまざまの不定愁訴を持つ男子35名と，検査所見正常なるも膀胱炎様症状を訴える女子7名に清心蓮子飲の投与をおこなった．

2．年齢と有効性の間に相関は見られなかった．

3．抗生剤・抗菌剤併用投与群で有効率の上昇は見られなかった．

4．生来胃腸虚弱な体質の患者に用いる方が，有効性が高いとの印象を得た．

5．重篤な副作用は認められなかった．

6．以上より清心蓮子飲は，下部尿路不定愁訴に対し，とくに胃腸障害のある患者に，ある程度の効果が期待でき，かつ長期にわたり安全に使用できる薬剤と考えられた．

本論文の要旨は1984年4月第2回泌尿器科漢方研究会および1984年7月第322回日本泌尿器科学会北陸地方会において発表した．

文　　献

1）石橋　晃・三木信男：下部尿路不定愁訴に対する清心蓮子飲治療．泌尿紀要 **30**：275～277，1984

2）百瀬俊郎・井口厚司：泌尿器科領域における漢方療法．西日泌尿 **45**：709～712，1983

3）藤平　健：漢方処方類方鑑別便覧，藤平漢方研究所，東京．1982

4）高木敬次郎・木村正康・原田正敏・大塚恭男：和漢薬物学．南山堂，東京，1982

（1985年1月14日迅速掲載受付）